

展評 春陽会評 1 『時事新報』 昭和九年四月二十六日付

里見勝蔵

里見勝蔵（さとみかつぞう 一八九五・明治二十八年—一九八一・昭和五十六年）

京都市四条生まれ。東京美術学校卒業後、フランスに留学、モリス・ド・ヴラマンクに師事。二科展に出品。一九二六年前田寛治、佐伯祐三らと一九三〇年協会を設立。児島善三郎らと独立美術協会を創立。再渡欧。フオビスム風の制作を行う。戦後に国画会に入会。

この二、三年来、毎春四、五月には独立美術の地方移動展について出かけた為、同じく春に開催する春陽会や国画会の展覧会も見ておきたいと思ひつつ、つい見る機会を失つてゐた。しかし、今年にはからずも春陽会に行つて見る事が出来る。——久し振りだ。以前よりよくなつてゐるだらう？

二、三の会員が退会したし、数人の新会員が推薦されたが、どんな風に変つただらう？ 特に働き盛りの若い会員や新帰朝者達の活躍振りを色々に興味を以つて期待して行つた。

見た。失望した。……かつて有力な三人の会員が脱退した為めだらう？ 老会員は何をしてゐる？ 誰が以前よりよくなつてゐるんだ？ 新会員も

之では心細いではないか？ そして新帰朝者はそろひもそろつてアカデミックばかり……。その中であつて二、三の知友の作品と森田恒友氏の遺作のみ輝いて見えた。これでは春陽会は淋しい。展覧会の経営や進展は甚だむづかしい事ではある。しかし、ここにはもう少し才能ある人が居る筈だと思ふのだが、芸術や絵画や生活に関する考へ方、態度が誤つてゐるんじゃないか知らず？ 味をねらつてチミツドになり、健康を求めて堅くなり、感覚に過ぎて脆弱となり、自然に従つて絵画を忘れ……。様々である。

《競馬場所見》（大森啓助氏）は美しく構図されてゐるが、顔も帽子も衣服も同一の毛糸の塊りの如くモヤ／＼してゐる。甘いといふ事を一概に悪くは思はないが、こんなに物質感が無くてはだらし無さすぎる。

《コムマンダトウレ・シモイの像》（サルヴトウレ・メルジェ氏）は素朴な佳作であり、外国人にしては日本人の感覚をよく出してゐる。物質感はよく描かれてゐる。これでこそ絵画の表現なのだ。

《牡丹》（水谷清氏）は六点の中で優秀である。赤と緑の組合わせがいい。同氏が色彩の上にいる感覚を所持してゐる事はうかがはれるが、今日の所では未だ成功してゐない。光線の取扱ひが荒い。炬燵より出て大いに仕事されたい。

《郊外の春》（坂口右左視氏）は晴れやかな緑と銀灰の空が誠に美しく対映してゐる。純粹といひ健康といひ実に好きな作品であつた。《並木道》（同氏）は冬枯れの木立に美しい詩と強い力が調和してゐた。

青山義雄氏の諸作は非常に感覚的だが、感覚と詩情に感溺し過ぎてゐる。

物質感が余りに欠乏して表現にソリジテを欠く。

足立源一郎氏の二点の雪山と花は乾燥して味じけないが、長谷川昇氏の諸作は皆赤紫の黒い透明な色で濡れて見える。技巧のある人である。

《佐渡加茂湖》(倉田白羊)は色の落ちついたよい小品である。

(四月二十六日付)



足立源一郎氏作 《白馬連峰》

展評 春陽会評 2

『時事新報』

昭和九年四月二十七日付

里見勝蔵



別府貫一郎氏作 《雪の金閣寺》

別府貫一郎氏の《雪の金閣寺》等四点の出品画は、いづれが勝れてゐるとも云ひ難い。一年一度の展覧会にこれでは淋しい。

《婦人像》(石井鶴三氏)は素直で美しくあるが、氏はもつと特徴ある性格の所有者なのだ。しかし、技巧がおい／＼上達して来たので、ともすれば平凡な自然主義となり氏独特の純朴さが失はれてる事は誠に惜しい。も一つには、氏は非常にいい新聞挿絵を描いたが、タブローまでが挿絵にわづらはされやしないか知ら。例へば《手術》に於けるが如く。

《海辺の丘(秋)》(林倭衛氏)はデリカな感覺的な作品である。美しさも、詩情も豊かである。しかし、少し脆弱だ。そして《冬の海辺風景》も佳作だ。好きなように喜悦を以て描いている。

《裏木曾の秋》はかつて見た鬼頭甕二郎氏の形式だが、《梅雨時》や《波》は異つた形式のものであるが、《波》や《渥美海岸》には林君あたりの影響が見へる。

氏の場合のみではない。会場の作品番号及び標題が目録と相異してゐるので大変困る。多分《夕陽》(?)や《興津の海》(小栗哲郎氏)は平明と健康で美しいが、ともすれば自然過ぎたり、遠近法が正確すぎて画が理に落ち勝ちである。

《「わたしのラバさん」一齣》(木村莊八氏)もタブローが挿画くさくなつてゐる。オペレットの眩惑さよりも殺人場面の様な無気味さである。

今関啓司氏も特徴ある性格の持主だと思つてゐるのに、アツサリした小品九点では物足りない。《椿》は可憐。

中川一政氏の三点の画面には小細なものが非常に多く描き込まれて、う

るさく見える。幾分繁雑でない《霜の山》がよく見える。

国盛義篤氏、栗田雄氏、倉田三郎氏、大沢鉦一郎氏等会友諸氏の活躍を希望する。

山崎省三氏はよき才能の所有者なのだが、本年の作品は実に淋しい。《台湾の少女》は二種の朱の対照で美しいが、自然が過ぎて詩が理に落ちた。

鳥海青児氏の八点の出品画中、《ノートルダム・ド・パリ》と《アラビア風の家と海》は本年春陽会の最大収穫である。(森田恒友氏の遺作陳列は別として)。《ノートルダム・ド・パリ》の堅実にして且つ詩味豊かな表現は、この一点の作品を以てしても鳥海氏の持つ才能の全部を賞讃するにも足りるだらう。

《扇》(小穴隆一氏)は少々挿画的に説明的だが、舞踊の婦女を美しく描いてゐる。《手鏡》では画架の上に日本の昔の丸鏡を置いて、花を置いた椅子に裸婦がよりかかつてゐるといふ組み合わせが、をかしな作り物である。

《びわ》(小林徳三郎氏)はガラスの光つた白も、背景の壁の白も同一つの白で、各物質の感じが表現されてゐない。これだけ形に於て自然を伝へつつ色彩に於ては自然をおこたるのはよくない。短い直線のくりかえしはリズムを生むよりは、硬直な感じとなつてゐる。何か描かうとしてゐる。描く時の心の状態が問題である。

山本鼎氏は常に軽快な筆触を以て描く。《盆栽のつゝじ》や《メノコのクロッキー》にその特色がよく見える。《朝の白馬山》は成功してゐない。

《早春のコロンヌ》(田中善之助氏)は《南支風景》よりはるかに上作であ

る。描写も確実なれば、色感もいい。雪は余りに暖かく、ドテラを着た様な雪だ。

横堀角次郎氏では《温室風景》は可憐ながら、もつと期待してゐた。《共同印刷》《顔》は新傾向が見えるが、未だ完成してゐない試作である。

(四月二十七日付)

展評 春陽会評 3

『時事新報』

昭和九年四月二十八日付

里見勝蔵



森田恒友氏遺作展示 《風景》

森田恒友氏の作品に接した僕の最初の記憶は、氏と長谷川昇氏の滞欧作品が白木屋（だったか？）に於ける展覧会場で、非常に鮮明な色彩で気持ちよく描かれた氏の《プロウバンス風景》である。その次、《城址》を美術院

の展覧会で見た時には——面白い気持を持つ人だ——と思った。

森田氏の初期の作品は黒田清輝氏の影響がうかがはれ、次には外光派で、その当時多くの人がやつてゐた風景写生派である。それから滞欧作品は専らセザンヌの影響を受けてゐる。そして後年は最後まで日本独特の風景を描く事に専念した。以上の四つの時代に区別する事が出来る。

初期や印象派時代の作品については、後年の森田氏の持つ特質が一向明瞭でなく、興味の乏しいものがあるが、滞欧時代には非常にセザンヌの感化を受けてはゐながら、森田氏独特の俳味がにちみ出てゐる。美しさもある。弾力もある。僕は非常にこれを親しみを以て接する事も出来る。後年の草原や水辺風景の余りに淡泊な油絵より、より多くの魅力を僕は感じてゐる。もしそれ等の作品が売品であるなら親しい知人に勧めたいときへ思つてゐる。仮へセザンヌの影響があつても森田氏の純情や詩味がよくうかがはれるではないか。後年の作品としては油絵よりもコンテ素描や水墨画がはるかに優れてゐる。

乾墨画では《木の間の沼》、《戸隠風景》その他一、二点非常に詩趣深い森田氏の完全なものがあつた。画面が小さくたつて少しもかまわない。

水墨画では《渡し場道》や《裾野の冬》の如く、水が余りに多く使用され過ぎたのもあつたし、同一濃度の墨が多すぎる画面もあつた。《四季田園和楽之図》の「若草」や「月夜」は複雑で且つよく出来てゐるが、結局は《平野人芦刈園》や《半月》や《屋後》の如く最も単純に描いたのが最もいいと思はれた。

《水郷初夏》の絵巻は最も脂がのつた時代の代表的なもので、力と詩が渾然と濃艶な魅力を以つて人にせまる。しかし、少し描き過ぎてゐる。《平野冊》の画帖は最も後年の無駄のない詩情に満ちた完全な森田恒友である。

かねぐち日本人森田氏の多くの素画や日本画の傑作を見たいと念じてゐたのが、遺作展がその機会とならうとは思ひがけなかつた。

*

《草木春秋》(小杉放庵氏)は日本画ハリマゼ半双の屏風である。小杉氏も特異な性格を持つ人であるにかかわらず、こんなに技巧的な画を描く故に、この人の剛胆が表はれない。其辺の事はもつともよくわかつた人であらうと思ふが。

《舞台裏にて》(斎藤清二郎氏)は濃青の背景がドラマチックな文楽の表現効果があつた。その日本クラシックに対して、《舞台の踊子》(伊藤慶之助氏)はモダン日本のダンサーを描いた華やかな場面だが、光の取扱が荒く、画が散漫である。

《臥裸婦》(二木淳氏)は暗い背景と明るい裸婦の対照は思ひ切つた表現の様であるが、明るい背景に明るい裸身を扱つた方が新鮮な効果に成功するだらう。

扱て春陽会評を終るに當つて、ここにある坂口右左視、林倭衛、鳥海青児、山崎省三諸氏の画才は美術学校や帝展や二科に求むる事が出来ないものであつて、時には盲目な人や理智的な人によつてこの甘い詩情がアマトウルみの如く看みなされるものであるが、よしや画面に欠点を持つても、これ

1934 26, 27, 28 April

昭和9年4月26-28日 第12回春陽展評 里見勝蔵「春陽会評 1, 2, 3」 『時事新報』

こそ芸術に大切な艶なる魅力である。これぞ更らに妙なる魅力に進展する
事を僕は希望しておく。(完)

(四月二十八日付)